

## 児童期の母子関係が青年期の自我形成に及ぼす影響

——自尊感情 (Self Esteem) と対人不安を中心として——

菅 原 正 和\*・伊 藤 由 衣\*

(2005年10月31日受理)

### I. 問 題 と 目 的

個人が「自分はこれでよい」と感じたり自己の価値を見出したりすることは、自我形成にとって不可欠である。日本の青年における Social Skill の極端な低下 (例, 中里・松井, 1997) と対人不安の増大をもたらしている要因は複雑であり単一ではないが、一世代前の家庭における親子関係と現在とは著しく異なり、人間関係の基盤となる子ども時代の親との関係の変化が大きな影響を与えている可能性は否定できない。

中でも、母親の養育態度が子どもの行動や自我形成に及ぼす影響については、これまで多くの研究がなされてきている。しかし、養育態度を測定する際、その形態をどのように分類するかが問題となる。辻岡・山本 (1975a, 1975b) らは、Schaefer (1965a, 1965b) によって作成された CR-PBI の因子分析により、親子関係の主要次元として4種の1次因子 (情緒的支持、同一化、統制、自立性) の存在を明らかにしている。また、「田研式・親子関係診断テスト」 (品川・品川, 1958) においては、親の望ましくない養育態度を10の型 (積極拒否・消極拒否・厳格・干渉・不安・溺愛・盲従・期待・矛盾・不一致) に分類しており、この他にも研究者によって分類の仕方が異なるものの、基本的には「拒否-受容」「支配-服従」の2つの主要次元 (辻岡・山本, 1976; 中塚, 1988) に還元されるものが多い。親の養育態度が如何にして子どもの自我形成に影響を与えるかについて、戸田 (1990) は次のように論じている。1つは親の実際の態度 (客観的環境) が直接子どもの行動や自我形成に影響を与える場合で、子どもが自らの行動を統制できない発達段階で、親が様々な言語を用いて社会的ルールに合うように子どもの行動を直接統制することによって子どもの社会的・情緒的発達を促す段階である。次に、認知された親の態度 (主観的環境) が一旦子どもの脳内で情報処理され、意味が付与される段階である。児童期には特にこの主観的環境の影響が大きいと考えられている。

これまでの親子関係の研究を見ると、親の受容的な態度や自立性の尊重が子どもの自尊心 (Self Esteem) を高めること (Grove, 1980; Perterson et al., 1983; Kawash et al., 1985), 安定した情緒の発達を促すこと (Ainsworth et al., 1978; Matas et al., 1978), 子どもの向社会的行動 (Pro-social Behavior) を育てること (Water et al., 1979; Ber-Tal et al., 1980) などが明らかにされている (戸田, 1990)。一方、今日急増している虐待等の問題ある養育行動が及ぼ

\* 岩手大学教育学部

\*\* 秋田市教育委員会

す子どもへの悪影響が具体的に研究されてきており、小口（1991）は、親の養育上の問題行動は子どもの自己開示を阻害するとしている。

本研究では、児童期における母親の養育態度が青年期の自我形成に如何なる影響を与えるかを、特に自尊感情と対人不安にターゲットを絞り取り上げる。

自我心理学では、従来自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことを自尊感情（Self Esteem）と言い、失敗経験と関連付けて度々研究されてきた（Eriksen, 1954; Alper, 1957; Coopersmith, 1960）。自尊感情は、探索行動が著しい幼児期にその行動を養育者により阻止される時（Allport, 1961）、次に初めて学校という社会場面に遭遇する6・7歳の頃（Adler, 1930）、そして identity を確立する青年期（Erikson, 1959）にそれぞれの critical period を迎えるという（井上, 1986）。これらの各発達段階において、最も身近な他者である親の養育行動は、子どもの自尊感情や対人不安の形成に、大きな影響を及ぼしていると考えerことは容易である。

対人不安とは対人場面に遭遇したり、あるいはそれを予測したりすることによって起こる個人の不安反応のことである（嶋野ら, 2004）。小川ら（1979a, 1979b, 1980）は、対人恐怖症者の内界に注目して対人不安を研究している。対人恐怖の感情は、日本人の対人関係様式を非常によく反映しており、そこには独特な自己意識が存在する（林・小川, 1981, 1982）。嶋野ら（2004）は、対人不安を高める働きをもっていると考えられるパーソナリティ特徴として、自分の容姿・行動・発言などに対する他者からの評価に注意を向け重視する傾向である「対人的自己意識」の高さや、他者からの承認を得ることを過剰に期待する「承認欲求」の高さなどを挙げている。松尾・新井（1998）の研究においては、対人的自己意識とほぼ同義である公的自己意識の高さと、対人的自己効力感の低さを合わせもつものが強い対人不安傾向を有することを明らかにしている。対人的自己効力感とは、対人場面において適切な社会的行動を遂行することが、どの程度自分に可能かについての主観的評価のことである。この他にも、他者に嫌われたくない欲求である拒否回避欲求（菅原, 1986）との関連などが報告されている。対人不安との関連が示唆される要因も多岐にわたるが、我国においては他者からの好意を評価基準とし、対人行動を自己評価的にみる傾向が対人不安につながる場合が多い。欧米との比較研究において日本では幼少期の家庭に、対人不安意識を育む様々な要因が多く存在するとされる（小川ら, 1979b, 1980）。

不安は、基底不安（Basic Anxiety）・顕在不安（MAS）・状態一特性不安（STAI）・対人不安等の多くの研究分野が関係するが、発達段階によって質的にも大きく変化していき、一般に中学生・高校生・大学生を比較すると大学生が最も高い不安意識を有している。小石（1995）は、対人不安が中学生に多いことについて、幼児期や児童期に積み上げられた親子関係・仲間関係などの問題が、環境的变化や発達の節目を迎えて表出すると考える。幼少期・児童期の認知的発達とともに、対人不安はエピソード記憶として自我形成に強い影響を与えることがある。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では大学生を対象に、児童期の親子関係＜ここでは母子関係＞が青年期の自尊感情および対人不安に及ぼす影響について分析する。

## II. 方 法

＜研究対象＞本研究の調査対象は、国立大学法人 A 大学 4 学部と私立 M 大学の学生 249 名。

＜調査時期＞2004 年 10 月に調査を実施。

<調査方法>無記名で、以下の尺度を修正して実施。①田研式・親子関係診断テスト（児童・生徒用）：

この尺度は、品川・品川（1958）によって作成されたものであるが、項目数が全部で100項目と非常に多く且つ標準化されていない。それ故より正確な data を得るためには他の尺度と同時に実施すると被験者の負担が大きくなるので軽減する必要がある、小口（1991）の縮小版を基本とした。この縮小版は、原尺度で10の型に分類されている negative な養育態度を2つの因子に大別し、項目数も18項目と減少している。原尺度は3件法であるが、本研究では統計上の事由から5件法を採用した。

また、元の尺度は児童・生徒を対象とした尺度であるが、「過去の一定の時期を対象として回答してもらうのであれば年齢制限はない」とされている。本研究は大学生が対象であるため、小学生時代を振り返りその時の母親の養育態度はどうであったか（今現在の自分は、その時の母親の養育態度をどう感じていたか）について解答を求めた。このため、質問項目を大学生にふさわしい文面に修正している。

<例>あぶないあそびはしないようにと、たえずちゅういされますか。

改：危ない遊びはしないようにと、絶えず注意されましたか。

原尺度には、児童・生徒用のほかに両親用があり、養育態度を親側と子どもの側の両側面から測定できるようになっている。しかし、「子どもの行動に影響を与えるのは、客観的な環境ではなく、子ども自身に認知された環境である」とする研究（森下，1981）や、親の調査をする場合には特に注意が必要で「親の養育態度を測定する際、親の側から出てくる回答には、<タテマエ>が多く混在し、<ホンネ>をつかむことが難しい」（繁多，1977）ことが知られており、今回は子どもの側からのみの評価をもとに養育態度を測定することとした。

## ②自尊感情尺度

Rosenberg（1965）によって作成された Self-Esteem Scale を邦訳（山本ら，1982）したものである。自尊感情の定義は尺度によって若干異なるが、この尺度における自尊感情とは、他者と比較することによって優越感や劣等感を感じるのではなく、自分自身で自己に対する尊重や価値を評定する程度であると考えられている。また、自身を「非常に良い」と感じるのではなく、「これでよい」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えられており、自尊感情が低いということは自己に対する価値意識を欠いていることを意味する。親子関係診断テストと同様、5件法により回答を求めた。

## ③対人不安意識尺度

林・小川（1981，1982）によって開発され、もともとは66項目12因子からなる。しかし嶋野ら（2004）の研究において、20年が経過し大幅な改変が必要である事が分かり、因子分析がやり直され39項目5因子構造として使用された。この5因子は、①集団に圧倒される悩み、②自分に満足できない悩み、③対人関係・視線に関する悩み、④自分や他人が気になる悩み、⑤気分が不安定な悩みからなる。本研究では、項目数・因子数や内容から、この39項目5因子が適当であると考えこれを採用した。本研究では「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。

## Ⅲ. 結 果

本調査の回答のうち、記入漏れや大学生以外、および親子関係診断テストにおいて母親以外の養育者について回答したものを除いたところ、有効回答は227名、有効回答率は91.2%であった。

親子関係診断テストについては先行研究において、2因子構造であることが判明しており先行研究に従い、因子数を2に指定して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、2因子（固有値1以上）が抽出された。それぞれの下位項目は、第1因子には8項目（ $\alpha=0.780$ 、寄与率18.6%）、第2因子には6項目（ $\alpha=0.686$ 、寄与率12.7%）が含まれ、これらを「厳格－拒否」、「過保護－期待」の2つの養育態度の型に分類した（Table 1）。

Table 1 親子関係診断テストの因子分析結果（n=227）

	因子1	因子2	共通性
因子1「拒否・厳格」因子 $\alpha=.780$			
1. あなたが話しかけても、「忙しいからね」と言って、相手になってくれないことがありましたか。	.550	-.077	.308
2. あまりあなたに相談しないで、いろんなことを決めてしまいましたか。	.608	-.096	.378
5. 同じことをしても、あるときは叱られ、あるときは叱られないということがありましたか。	.592	-.046	.340
6. あなたは、しょっちゅう、小言を言われましたか。	.614	-.027	.190
9. あなたの友達のことを、やかましく言いましたか。	.474	.249	.352
11. 外出先とか、人の前では、あなたに対する態度が、家にいる時と違うことがありましたか。	.560	.012	.377
14. あなたの頼みや、約束を、よく忘れたり、聞いてくれなかったりしましたか。	.548	-.162	.297
15. 言われた通りにしなかったら、ひどく叱られましたか。	.510	.104	.287
因子2「過保護・期待」因子 $\alpha=.686$			
3. あなたの身の周りのことを、家でうるさいほどよく手伝ってくれましたか。	.308	.495	.392
4. 友達にいじめられたり、先生に叱られた時、あなたをかばってくれましたか。	-.055	.432	.314
7. 少しの怪我や、病気でも、とても心配して、手当てをしてくれましたか。	-.076	.539	.327
10. あなたが、頼めば、どんな大変なことでも、喜んでしてくれましたか。	-.065	.623	.271
17. あなたを立派な人にするために、どんなことでもしていましたか。	-.027	.575	.332
18. あなたが、ねだれば、高いものでも買ってくれましたか。	.005	.466	.217
因子負荷量2乗和	2.606	1.775	
寄与率（%）	18.615	12.681	
累積寄与率（%）	18.615	31.296	

対人不安意識尺度についても同様に、先行研究に従い、因子数を5つに指定して因子分析(主因子法, バリマックス回転)を実施した。しかし因子が安定しなかったため、因子数を減らして再度因子分析をやり直した。因子数を3に指定し、因子負荷量.40未満の項目、二重負荷項目を除外した結果、計26項目で最も明確に分かれた。それ故本研究では、3因子(固有値1以上)を確定して使用することとした。第1因子には12項目が含まれ( $\alpha=0.918$ , 寄与率22.25%), 「大勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような気がする」「人の目を見るのがとてもつらい」などの下位項目で構成されている。そこで、第1因子は「集団や他人に圧倒される悩み」因子と命名した。第2因子には9項目が含まれ( $\alpha=0.882$ , 寄与率16.65%), 「職場、学校のクラス、近所の人に自分がどのように思われているのか気になる」「人と会うとき自分の顔つきが気になる」などの下位項目で構成されている。そこで、第2因子は「自分や他人が気になる悩み」因子と命名した。第3因子には5項目が含まれ( $\alpha=0.830$ , 寄与率11.19%), 「ものごとくに熱中できない」「生きていることに価値が見いだせない」などの下位項目で構成されている。そこで、第3因子は「自分に満足できない悩み」因子と命名した(Table 2)。

以上の因子分析の結果、抽出された因子について以下の分析を行った。

### (1) 男女差

養育態度2因子、自尊感情、対人不安傾向3因子のそれぞれについて男女差の有無を調べたが、どの因子においても男女差は見られなかった(Table 3~5, Fig. 1~3)。

### (2) 相関

養育態度の各因子と自尊感情との相関を調べた結果、「過保護-期待」型との間に弱い正の相関がみられた(Table 6)。

同様に、養育態度と対人不安との相関を調べたところ、「厳格-拒否」型と対人不安の3つの因子(「集団や他人に圧倒される悩み」, 「自分や他人が気になる悩み」, 「自分に満足できない悩み」)のそれぞれに正の相関がみられた(Table 7)。

また、自尊感情と対人不安の各因子との相関を調べたところ、3つの因子それぞれに負の相関が見られた(Table 8)。

### (3) 分散分析

養育態度に関して、「厳格-拒否」得点と「過保護-期待」得点のそれぞれにおける平均値と最大値・最小値を用いてH群、L群に分類した。さらにそれらをHH群、HL群、LH群、LL群の4群に分け、「自尊感情」と対人不安の3因子(「集団や他人に圧倒される悩み」, 「自分や他人が気になる悩み」, 「自分に満足できない悩み」)のそれぞれの得点をもとに分散分析を行った。その結果、更に有意な関係が認められたものについて、TukeyのHSD法による多重比較を行った。「自尊感情」については、「過保護-期待」得点が高く、「厳格-拒否」得点が低い被験者(LH群)は、「厳格-拒否」得点、「過保護-期待」得点ともに低い被験者(LL群)に比べて有意に高かった(Table 9)。

対人不安の「集団や他人に圧倒される悩み」については、「厳格-拒否」得点が高く、「過保護-期待」得点が低い被験者(HL群)は、LH群に比べて有意に高かった。「自分や他人が気になる悩み」については、「厳格-拒否」得点、「過保護-期待」得点ともに高いもの(HH群)

Table 2 対人不安意識尺度の因子分析結果 (n=227)

	因子1	因子2	因子3	共通性
因子1「集団や他人に圧倒される悩み」 $\alpha = .918$				
1. 大勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような気がする。	.645	.273	.038	.492
2. 小心である。	.595	.265	.075	.430
3. 人の目を見るのがとてもつらい。	.522	.349	.147	.416
7. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。	.773	.077	.113	.617
9. 気が弱い。	.636	.247	.119	.479
13. 大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。	.758	.143	.070	.600
15. 内気である	.751	.112	.217	.624
21. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない。	.526	.300	.232	.421
25. 引っ込み思案である。	.714	.096	.222	.568
30. 会議などの発言が困難である。	.598	.108	.113	.382
34. 大人数の雰囲気、なかなか溶け込めない。	.567	.233	.292	.461
35. 人の前に出るとオドオドしてしまう。	.726	.204	.120	.583
因子2「自分や他人が気になる悩み」 $\alpha = .882$				
4. 自分のことが皆に知られているような感じがして、思うようにふるまえない。	.309	.504	.083	.356
5. 職場、学校のクラス、近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。	.174	.650	.104	.464
12. 人と会うときに、自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えているのではないかと不安になることがある。	.103	.705	.057	.511
20. 人と会うとき自分の顔つきが気になる。	.154	.657	.037	.461
27. 人と話をする時、目をどこへもっていったらいいか、わからない。	.360	.492	.186	.406
28. 友達が自分を避けているような気がする。	.181	.542	.316	.426
29. 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。	.150	.691	.268	.571
33. 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。	.176	.688	.211	.549
37. 自分が人に、どう思われているのかよく考えてしまう。	.234	.667	.279	.577
因子3「自分に満足できない悩み」 $\alpha = .830$				
8. ものごとに熱中できない。	.212	.094	.677	.512
10. 生きていることに価値が見いだせない。	.278	.268	.482	.381
16. 充実して、生きている感じがしない。	.191	.271	.527	.388
39. ひとつのことに集中できない。	.101	.188	.773	.643
36. 何をやるにも集中できない。	.092	.173	.815	.702
因子負荷量2乗和	5.784	4.329	2.908	
寄与率 (%)	22.246	16.649	11.186	
累積寄与率 (%)	22.246	38.896	50.082	

Table 3 養育態度 2 因子における男女差

	男子	女子	t 値
厳格・拒否	20.61 (7.160)	19.92 (6.417)	0.738n. s.
過保護・期待	17.58 (4.393)	17.65 (4.830)	-0.095n. s.

( ) 内は標準偏差

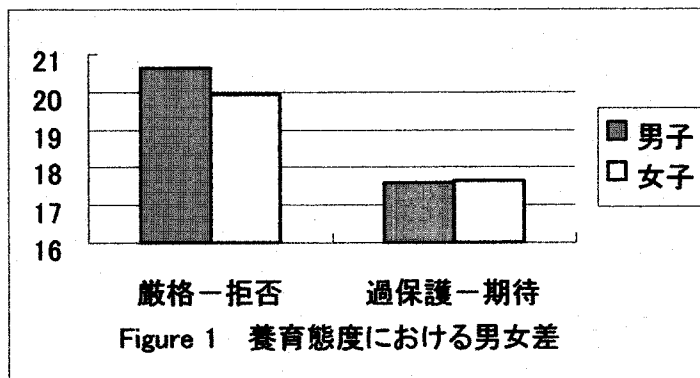


Table 4 自尊感情における男女差

	男子	女子	t 値
自尊感情	33.36 (6.882)	31.48 (7.916)	1.772n. s.

( ) 内は標準偏差

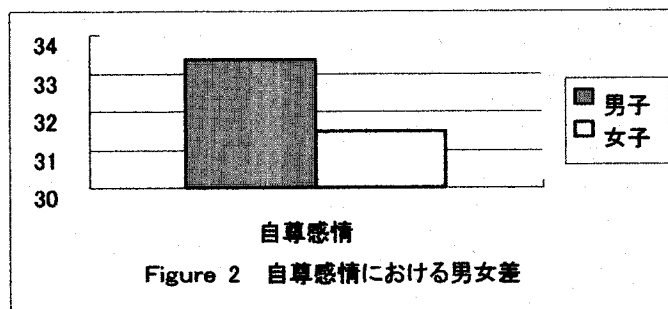
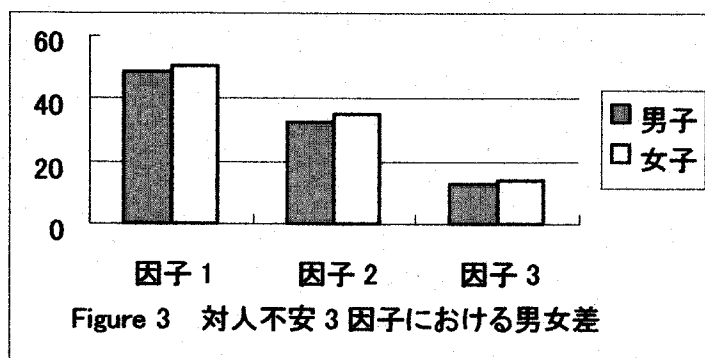


Table 5 対人不安3因子における男女差

	男子	女子	t 値
集団や他人に圧倒される悩み	48.55 (16.752)	50.59 (13.993)	-0.975n. s.
自分や他人が気になる悩み	32.43 (11.921)	34.79 (11.112)	-1.477n. s.
自分に満足できない悩み	12.69 (6.761)	14.02 (5.940)	-1.525n. s.

( ) 内は標準偏差



因子1…集団や他人に圧倒される悩み 因子2…自分や他人が気になる悩み

因子3…自分に満足できない悩み

Table 6 養育態度と自尊感情との相関

	厳格-拒否	過保護-期待
自尊感情	-0.099	0.153*

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$ 

Table 7 養育態度と対人不安との相関

	厳格-拒否	過保護-期待
集団や他人に圧倒される悩み	0.285**	-0.012
自分や他人が気になる悩み	0.262**	-0.018
自分に満足できない悩み	0.201**	-0.074

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$



Table 8 自尊感情と対人不安との相関

	因子1	因子2	因子3
自尊感情	-0.443**	-0.530**	-0.596**

因子1…集団や他人に圧倒される悩み 因子2…自分や他人が気になる悩み

因子3…自分に満足できない悩み

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

Table 9 養育態度HH群, HL群, LH群, LL群における自尊感情得点の平均値と標準偏差およびF値

	HH群	HL群	LH群	LL群	F値	多重比較(5%水準)
自尊感情	31.69 (6.928)	31.23 (7.563)	34.66 (7.913)	30.91 (7.585)	3.063*	LH > LL

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

Table 10 養育態度HH群, HL群, LH群, LL群における対人不安傾向3因子の得点の平均値と標準偏差およびF値

	HH群	HL群	LH群	LL群	F値	多重比較(5%水準)
因子1	52.46 (12.995)	53.58 (14.729)	45.90 (16.730)	48.66 (14.344)	3.114*	HL > LH
因子2	36.44 (9.648)	37.67 (10.718)	30.86 (12.356)	32.07 (11.454)	4.798**	HH, HL > LH HL > LL
因子3	14.81 (5.077)	14.40 (6.763)	10.90 (5.451)	14.28 (6.795)	5.087**	HH, HL, LL > LH

因子1…集団や他人に圧倒される悩み 因子2…自分や他人が気になる悩み

因子3…自分に満足できない悩み

\*\* :  $p < .01$ , \* :  $p < .05$

Table 11 対人不安3因子における自尊感情(H群, L群)の得点差

	H群	L群	t値
集団や他人に圧倒される悩み	44.28 (13.88)	56.55 (13.49)	-6.740***
自分や他人が気になる悩み	29.35 (10.07)	39.47 (10.49)	-7.376***
自分に満足できない悩み	10.67 (4.41)	17.00 (6.38)	-8.546***

とHL群は、LH群に比べて有意に高く、またHL群はLL群に比べて有意に高かった。「自分に満足できない悩み」については、HH群、HL群、LL群は、LH群に比べて有意に高かった (Table 10)。

自尊感情についても、平均値と最大値・最小値を用いてH群、L群の2群に分け、対人不安の3因子のそれぞれについてt検定を行った。その結果、3因子すべてにおいて、L群の方がH群に比べて有意に高かった (Table 11)。

#### IV. 考 察

本研究では、子どもから見たかつての母親の養育態度と現在の自尊感情、対人不安との関連性を検討した。その結果、以下の点が明らかになった。

##### (1) 養育態度の認識、自尊感情、対人不安における男女差

養育態度2因子における男女の有意な差は認められなかった。小口 (1991) の研究においてもこの2因子に性差は見られず、我々の結果と一致する。自尊感情においても男女の有意な差は見られなかった。山本ら (1982) の研究では、男子の自己評価得点は、女子の得点よりも有意に高いとされている。本研究でも男子の得点の方が女子の得点よりも高い傾向にあったが有意ではなく、山本らとは異なる結果を示している。また、対人不安3因子における男女差は何れの因子においても差がなかった。松尾・新井 (1998) の研究によると、対人不安傾向は男子よりも女子の方が高いとされておりこれと一致しない。この原因は、松尾・新井の研究が小学4・5・6年生を対象としたものであることから、発達段階の差によるものと考えられるが定かではない。

##### (2) 養育態度と自尊感情

養育態度と自尊感情の関連を検討したところ、「過保護一期待」得点が高く、「厳格一拒否」得点が低いLH群は、「厳格一拒否」得点、「過保護一期待」得点ともに低いLL群に比べて自尊感情が高いという結果が得られた。「過保護一期待」型は、過度の子どもへの期待、干渉、溺愛、盲従などの本来は望ましくない養育態度を含む型を指すが (品川・品川, 1958)、他方で子どもの要求や発言に重きをおき尊重するという行動も含まれるため、子どもが自分自身を「これでよい」と感じる事が多く、自尊感情が高められたのではないかと考えられる。

##### (3) 養育態度と対人不安

養育態度と「集団や他人に圧倒される悩み」との関連を見ると、「厳格一拒否」得点が高く、「過保護一期待」得点が低いHL群は、LH群よりも集団や他人に圧倒され易くなっている。「自分や他人が気になる悩み」との関連では、HL群はLH群やLL群よりも自分や他人が気になっていることが明らかである。また、「厳格一拒否」得点、「過保護一期待」得点ともに高いHH群は、LH群に比べて自分や他人が気になっていることも分った。

「厳格一拒否」型は、「過保護一期待」型とは対照的に、子どもに関心が薄い消極拒否や、怒鳴ったり叩いたりする積極拒否、命令や禁止の多い厳格などの望ましくない養育態度を含む型を指す (品川・品川, 1958)。この型の得点が高い者は、子どもの頃に自分のすることを否定さ

れる機会が多く、受け入れてもらえなかったことが多かったと認識している。その結果、他者から自己を肯定してもらいたいと考えたとき、それを自己がなし得るのかどうかという点に不安を覚えるという心性を獲得し易くする。嶋野ら（2004）は、対人不安を引き起こすパーソナリティには、概して「他者にある種の印象を与えたいという目標をもち、しかもそれに成功できるかどうかの疑問をもったときに生ずる」という特徴があるとしている。「厳格一拒否」型の得点が高い者がもつ、他者と関わる際に不安を覚えるという心性は、かかる自我形成と関連しているかもしれない。つまり彼らは対人場面に遭遇し、「他者にある種の印象を与えたい」と強く願うが、「それに成功できるかどうか」に不安を覚え、そのことで圧迫感を感じている可能性がある。

「厳格一拒否」得点、「過保護一期待」得点がいずれも高いHH型は、厳しくする一方で甘やかすもするという両極的養育行動を内包する。場合によって厳しかったり優しくったりする親の一貫しない態度に混乱を覚えた者は、相手がどのように反応を返してくるのかを過度に気にする心性を形成し易いと考えることができる。そして対人場面に際しても同様に他者の反応を過度に気にするために、「自分や他人が気になる悩み」を抱えている可能性がある。次に、「自分に満足できない悩み」との関連を見ると、HH群、HL群、LL群の3群は、LH群に比べて自分に不満足であることが示された。先の自尊感情との関連の中で触れたように、「過保護一期待」得点が高いということは、児童期に自分の要求を受け入れてもらったり、自分自身が尊重されていると感じたりする機会が多かったと考えられる。このことは児童期の自己への充足感につながっていたものと思われ、更に児童期の満足感の経験は青年期の自尊感情に関連する自我形成へとつながっている可能性はある。但し「過保護一期待」型は両価的値養育態度のひとつなので、これによってもたらされる自尊感情がどのような「質」のものであるかについては、今後の検討が必要であろう。

#### （4）自尊感情と対人不安

自尊感情と対人不安のそれぞれの因子との関連を考察する。自尊感情の高いH群と低いL群では、「集団や他人に圧倒される悩み」「自分や他人が気になる悩み」「自分に満足できない悩み」のそれぞれについて、L群の方が悩みが大きい。対人不安のすべての因子においてかかる現象が認められるので、自己の能力や価値を認め「これでよい」と感じるができない者は、対人場面における不安が大きくなっている。

### V. 今 後 の 課 題

本研究では、母親の養育態度と自尊感情、対人不安との関連性が示された。児童期に、母親にどのような態度で接せられたと認知しているかによって、青年期の自尊感情、対人不安の程度に有意な差が見られた。親の望ましくない養育態度を「厳格一拒否」型と「過保護一期待」型に分類した場合、「厳格一拒否」型の養育態度は子どもの自尊心の向上を妨げ、対人不安を増大させる傾向があることが明らかになった。一方で、「過保護一期待」型の養育態度は、子どもの自尊心を向上させ、対人不安を減少させる傾向があるが「過保護・期待」型の構成概念妥当性・内容妥当性の再吟味が必要である。更にここで注意すべきなのは、この2つの型はいずれも親の両価的養育態度であるという点である。実際に小口（1991）の研究では、「過保護・期待」

因子が子どもの自己開示を妨げる傾向があることも明らかにされている。

また、対人不安意識の著しい者は、あらゆる面で自己や家庭をネガティブにとらえる傾向がある(小川ら, 1980)。それ故現時点での対人不安意識が、子どもの頃の家庭環境を実際よりも否定的に思い起こさせる働きをしているということも考えられ、今後はこの点についての検討が必要であろう。

## 引 用 文 献

- 1) Adler, A. (1930) *The Education of Children* (高橋堆治訳 1962 子どもの劣等感—問題児の分析と教育— 誠信書房).
- 2) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M., Waters, E., and Wall, S. (1978) *Patterns of Attachment*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- 3) Allport, G. W. (1961) *Pattern and Growth in Personality*. Holt, Rinehart and Winston Co (今田恵監訳 1968 人格心理学上・下 誠信書房).
- 4) Alper, T. G. (1957) Predicting the direction of selective recall: Its relation to ego strength and need-achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 38, 224-238.
- 5) Bar-Tal, D., Nadler, A., and Bleckman, N. (1980) The relationship between Israeli children's helping behavior and their perception of parents' socialization practices. *Journal of Social Psychology*, 111, 159-167.
- 6) Coopersmith, S. (1960) Self-Esteem and need achievement as determinants of selective recall and repetition. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 60, 310-317.
- 7) Erikson, C. W. (1954) Psychological defenses and "ego strength" in the recall of completed and incompleted tasks. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 45-50.
- 8) Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. Psychological Issues, New York: International Universities Press (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房).
- 9) 文野佐紀・藤田尚文 (2000) 親の養育態度が子どもの対人行動に及ぼす影響. 高知大学教育学部研究報告, 59, 43-54.
- 10) Growe, G. A. (1980) Parental behavior and self-esteem in children. *Psychological Reports*, 47, 499-502.
- 11) 橋本剛 (1997) 大学生における対人ストレスイベント分類の試み. *社会心理学研究*, 13, 64-75.
- 12) 林洋一・小川捷之 (1981) 対人不安意識尺度構成の試み. 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-45.
- 13) 林洋一・小川捷之 (1982) 対人不安意識尺度構成の試み (その2). 横浜国立大学保健管理センター年報, 2, 23-37.
- 14) 井上信子 (1986) 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連. *教育心理学研究*, 34, 10-19.
- 15) Kawash, G. F., Keer, E. N., and Clewes, J. L. (1985) Self-esteem in children as a function of perceived parental behavior. *Journal of Psychology*, 119, 235-242.
- 16) 小石寛文 (1995) 人間関係の発達心理学3. 児童期の人間関係, 培風館.

- 17) Matas, L., Arend, R. A., and Sroufe, L. A. (1978) Continuity of Adaptation in the Second Year: The Relationship between Quality of Attachment and Later Competence. *Child Development*, 49, 547-556.
- 18) 松尾直博・新井邦二郎 (1998) 児童の対人不安傾向と公的自己意識, 対人的自己効力感との関係. *教育心理学研究*, 46, 21-30.
- 19) 森下正康 (1981) 養育態度の認知差と子どもの性格に関する発達的研究. *和歌山大学教育学部紀要 (教育科学)*, 30, 43-55.
- 20) 森下正康 (1982) 中学生における親の養育態度と対人特性の同一視. *教育心理学研究*, 30, 52-56.
- 21) 中塚善次郎 (1988) 障害幼児に対する両親の養育態度因子とその両親間における類似性. *教育心理学研究*, 36, 152-160.
- 22) 中里至正・松井洋 (1997) 異質な日本の若者たち. プレーン出版, pp. 19-90.
- 23) 小川捷之・林洋一・永井徹・白石秀人 (1979a) 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (1) 比較文化的視点から. *横浜国立大学教育紀要*, 19, 205-220.
- 24) 小川捷之・永井徹・白石秀人 (1979b) 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (2) 地域性および幼少期における家族以外の成員との接触・非接触の観点から. *横浜国立大学教育紀要*, 19, 221-239.
- 25) 小川捷之・木村方美・林洋一 (1980) 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (3) 幼少期の家庭環境と自己像に関する比較文化的検討. *横浜国立大学教育紀要*, 20, 60-77.
- 26) 小口孝司 (1991) 母親の自己開示と養育態度が子どもの自己開示と学級集団への適応に及ぼす効果. *社会心理学研究*, 6, 175-183.
- 27) Perterson, G. W., Southworth, L. E., and Peters, D. F. (1983) Children's self esteem and maternal behavior in three low-income samples. *Psychological Reports*, 52, 79-86.
- 28) Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 29) Schaefer, E. S. (1965a) Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- 30) Schaefer, E. S. (1965b) A configurational analysis of children's reports of parent behavior. *Journal of Consulting Psychology*, 29, 552-557.
- 31) 繁多進 (1977) 環境と性格形成. 藤永保・三宅和夫・山下栄一・依田明・空井健三・伊沢秀而 (編), *性格心理学*, 有斐閣, 59-75.
- 32) 嶋野重行・鈴木志穂子・菅原正和 (2004) 青年期における IWM (Inter Working Model) と対人不安. *岩手大学教育学部研究年報*, 63, 105-118.
- 33) 品川不次郎・品川孝子 (1958) *親子関係診断テストの手引*. 日本文化科学社.
- 34) 菅原健介 (1986) 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる 2 つの欲求について—. *心理学研究*, 57, 134-140.
- 35) 高橋道子・神宮英夫 (1984) 安全教育における母子関係の発達課題. *教育心理学研究*, 32, 40-45.
- 36) 戸田弘二 (1990) 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Models との関連. *北海道教育大学紀要 1-C*, 41, 91-99.
- 37) 富田俊昭・水子学・金光義弘 (1999) 認知的概念モデルによる対人不安の検討—自己意識特性, 自己評価および対人不安の関連について—. *川崎医療福祉学会誌*, 9, 49-54.
- 38) 辻岡美延・山本吉廣 (1975a) 斜交軸回転による因子構造の交叉妥当化—親子関係診断テストに

ついでの一結果一. 関西大学社会学部紀要, 6, 53-66.

- 39) 辻岡美延・山本吉廣 (1975b) 親子関係の四次元—Schaefer の CR-PBI の分析—. 関西大学社会学部紀要, 7, 146-160.
- 40) 辻岡美延・山本吉廣 (1976) 親子関係の類型—親子関係診断尺度 EICA—. 教育心理学研究, 26, 19-28.
- 41) Waters, E., Wippman, J., and Sroufe, L. A. (1979) Attachment, positive affect, and competence in the peer group: Two Studies in construct validation. *Child Development*, 50, 821-829.
- 42) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.